

[報告]

山形大学基盤教育シンポジウム
「教養教育改革の成果と課題」報告
学士課程教育の構築を目指した教養教育改革
ー学士課程を通じ、人間力を育成する「基盤教育の確立」ー

佐々木 克 之

I. はじめに

平成24年12月15日、山形大学サテライトである東京都港区芝浦のキャンパス・イノベーションセンター1階国際会議室において、山形大学基盤教育シンポジウム「教養教育の成果と課題」が開催された。同シンポジウムでは、山形大学の学士課程教育の構築を目指した教養教育改革について、基調講演と4つの話題提供が行われた。

本報告書は、このシンポジウムに参加した筆者が、配布資料¹⁻⁵⁾を適宜引用しながら、山形大学の取組みについて報告し、これから行われる薬学教育モデル・コアカリキュラム改訂を前に、参考となり得る内容を抽出・検討しようとするものである。

II. 報告事項

第1部・基調講演

「山形大学における教育改革について」¹⁾と題して、山形大学教育・学生支援担当理事の小山清人氏から、山形大学の「基盤教育」構築にいたる経緯等について以下のような説明があった。

2007年9月に結城章夫氏が36年間にわたる中央省庁（科学技術行政・教育行政）勤務を経て、国立大学法人山形大学学長に就任した。結城学長は、「教養教育を重視」し、2008年に「教養教育の再構築」を目指してワ

ーキンググループを立ち上げ、アクションプラン（結城プラン2008）という具体的な目標を作成させ、2009年には「基盤教育院」を設置した。従来の学士課程教育においては、教養教育と専門教育が明確に区分されており、両者の教育内容の統合は学生が自らの責任で行う必要があった。しかしながら、学士課程教育修了者への社会的な期待が高まる中、学生の自主性にゆだねるのみでは必ずしも所期の目的を達成することは困難である。そこで教養教育と専門教育との間の壁を取り去り、学士課程全体を見渡せる一体的な学習目標・位置づけの下での体系化を行い、初年次教育を「基盤教育」と改めた。2010年には、次の3つの基本方針を決定し、「基盤教育」がスタートした。1つ目は、「人間力」であり、社会で人間として生きていくために必要な力を意味し、山形大学の1つのキーワードになっている。2つ目は、「幅広い教養」、3つ目は、「自立した個人としての態度・志向性」である。「基盤教育」に対する結城学長の要望は、「教員中心のカリキュラム」から「学生主体のカリキュラム」への改革、つまり、教員が教えたいことを教えるのではなく、また一般的な教養を教えるということではなく、教員が教えなければならないこと・学生が学ばなくてはならないことを教えて欲しいということであった。

この講演に関して、山形大学教育改革のキーワードとして掲げられた「人間力」という言葉が一番印象に残った。このような抽象的な基本方針を、カリキュラムの中でどう具現化し展開しているのか、学生たちは「人間力」が身についた、高まったと自覚できるのか等、実際に授業を聴講したり体験していないので疑問は多いが、卒業後にどのような職種に就くにしても、一人の人間として生きていくためには何が必要なのかを探求させ、学ばせることは、大学進学率が5割を超える高等教育のユニバーサル段階⁶⁾の中で、大学で学ぶ意義・目的の明確化とともに学士課程教育の中で重要な意味を持つと考える。本学の教育理念には、「人間の生命と健康にかか

わる者として、思いやりの心と高い倫理観を持ち・・・」や「他者との交流を通じて、友情を育み、人格形成に努めるとともに、異文化を理解し国際的視野に立って活躍できる人材を育成します」とある。これらは山形大学の目指す「人間力」に該当するものではないのか、また、これらの領域については、われわれ総合科目担当教員が中心（基盤）となって、全学を挙げて取り組むべき課題なのではないかと考える。

次に基盤教育での実施状況（2010年から現在まで）についての説明があった。「基盤教育院」は、教員16人、院長、4部門長から構成されており、教員16名の内訳は、従来からあった情報センター、国際センター等の各センターから10名、新採用教員6名の16名で構成されているということであった。また、4部門長とは、導入科目、基幹科目、教養科目、共通科目の4部門長を指す。「基盤教育」は、1年生1,760人を対象に、科目数774、授業コマ数852、教員数延べ861人で行っており、従来科目の内容ごとであった区分を、カリキュラムの構成要素ごとに目的・目標に応じて導入、基幹、教養、共通、展開と5つの区分に再編し、学士課程教育の中での、「人間力」を養うために学ぶ科目という位置づけをしているということであった。再編された5つの区分の主な内容については、配布資料¹⁾により以下のように説明があった。

(1) 導入科目（スタートアップセミナー）

大学で何を学ぶのかという目的意識をはっきり持ってもらうために、全学部で必修の科目であり、学部別にクラスを編成して共通テキストを用いて大学での学び方やアカデミックスキルの基礎を学ぶ。

(2) 基幹科目

山形大学が重視する「共生」と「人間」をテーマとして山形大学生として身につけるべき素養を習得する。

(3) 教養科目

学部・学科や専門分野に関係なく幅広い分野に接することで視野を広げる。特徴としては、キーワードである「体験型」科目が多い。

例) 3.11東日本大震災の時には、ボランティアを単位化し、多くの学生たちが働いた。

(4) 共通科目

英語、情報リテラシー、体育などで、学問の実践において必要な知識や能力、そしてそれを支える健康や体力を身につける。特に英語の授業に特徴があり、TOEICを受けさせて、習熟度別にクラス分けを行って授業をしている。

(5) 展開科目

2年次以降において専門科目を学びながら新たな視点で教養を高める。

基盤教育評価改善会議において、自己評価、外部評価を丁寧に行い、これらの繰り返しによってよりよい方向に改善していこうとしている。

次に学士課程教育についての説明があった。各学部は学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針、入学者受入れの方針の3ポリシーをそれぞれに設定・検証しており、その具体的な評価方法として、外部評価者から成る「アドバイザー・ボード（顧問委員会、監査役会）」を組織して、外部評価者に、ポリシー、各学部の実習の手引き・学生便覧、シラバス等について「どう思うか」などの議論を年2回実施しているということであった。

この評価方法に関して、外部評価者の構成等、詳しい説明はなかったものの、現在まで築き上げたものに満足することなく、より良いものに改革していこうという山形大学教養教育改革の真摯な取組み方に感銘を受けた。

また、山形大学基盤教育の特色として、ベスト・ティーチャー賞という賞を設け、毎年度3名の教員を表彰している（賞金総額；100万円）ということであった。この賞は、基盤教育を担当している先生方から、優れた授業をしている先生を推薦していただき、評価指標（15項目）を基に審査

し、表彰しているということ、そしてベスト・ティーチャー賞以外にも、良い授業をしている優秀な教員には、自薦・他薦を問わず応募していただき、同様に評価指標（15項目）に基づいて審査し、表彰しているということであった。受賞者には、大学から年末12月25日（クリスマス）に10万円プレゼントされる（今年は24名）。同じ教員が何年も連続して受賞したら、その教員は山形大学の顔になるという発想から、同一人物が何回受賞してもよいことになっているということであった。

この特色に関しては、「研究」について学会等で表彰制度が設けられてはいるものの、優秀な教育者に対するの表彰は、私自身あまり聞いたことがなかったため、非常に興味深かった。私は、この制度そのものには大賛成であるが、その評価指標を作り上げる作業は並大抵ではないと考える。山形大学では、先生方から出された多くの指標項目の中から15項目に絞って評価しているとのことであった。残念ながら、今回はその内容については公表されなかったが、機会があればその指標を拝見したいものである。

次に「YUサポーターシステム」についての説明があった。これは、平成16年から全学的に導入実施したもので、アドバイザー教員（従来の担任に相当）が学生20人を担当し、修学指導、学生生活相談、就職活動などの面から受け持ち学生を常時把握し、適切な時期に適切な支援を行うものである。この基幹となるものが、成績・履修状況・学生情報・相談履歴・就職活動状況等を、学生個人ごとに管理するWeb上の電子カルテ「サポート・ファイル」ということであった。また、教育プログラムの人材育成目標（ディプロマ・ポリシー）と、その実現のために目的・目標を明確化した体系的なカリキュラム編成を、学習指針として学生に提供するツールとして「学習ポートフォリオ」システムというものがあり、修学支援のための「YUサポーターシステム」の一部として導入されているということであった。学生は、「学習ポートフォリオ」によりWeb上で自らの履修

状況と教育プログラム上の位置付けを確認し、カテゴリ毎の達成目標をベンチマークとしながら、日々の学習を進めることができ、さらに、カテゴリ毎の学習目標達成状況をレーダーチャートで視覚的に確認することができるということであった。

本学では、1年次から4年次までは組担任、5・6年次は配属教室教員が適宜、学生の指導・支援等を行っている。私自身のことを言えば、学生の指導にWeb上の「学生カルテ」を十分活用できていなかったかもしれない。今後は、もっと有効活用できるように努力しなければならないと反省した次第である。さらに、本学でも山形大学の「学習ポートフォリオ」のようなものが導入されれば、学生本人の主体性の育成を含めた教育効果の向上が期待できるのではないかと考える。

最後に今後の課題として、次の3つが上げられた。1つ目は、基盤教育の実施における理念の周知徹底をすることである。2つ目は人間力、教養、態度・志向性の到達目標を具体化することと学習成果の評価指標を作成することである。そして3つ目は、学生の目的意識に応じたカリキュラムを作成するということであった。

第2部・話題提供

話題提供は、導入科目部門長・立松潔氏は「初年次導入教育の目指すもの」²⁾、基幹科目部門ディレクター・齋藤学氏は「“人間・共生” 大学理念と共通感覚」³⁾、教養科目部門長・須賀一好氏は「教養科目の不易と流行」⁴⁾、共通科目部門長・阿部宏慈氏は「技能と教養の間で」⁵⁾ というタイトルで、それぞれの教育目標、教育内容、実施状況および今後の課題について、配布資料^{2~5)}を基に説明を行なった。

これ以降は、私が話題提供の中で今回の趣旨に添うような点を取り上げ、報告することとしたい。第1に、導入科目の実施状況と特色の中で紹介が

あった共通テキストについてである。山形大学では、導入科目としてスタートアップセミナーを2単位必修科目として開講しており、その教材として使用する『なせば成る』というテキストを基盤教育院が作成しているとのことであった。また、初年次導入教育の今後の課題の中で、大人数でなかなかプレゼン、レポートの指導までいかないクラスもあるという現状を踏まえ、前期だけでは不十分なのでもっと学びたいという学生のために、試験的に今年度後期に「アドバンスセミナー」（1年後期・選択科目）として開講した。来年度も開講する予定なので、そのテキストとして使用する『社会人基礎力をみがく』を現在作成中であるとのことであった。

自分の専門外である基盤教育院の先生方が『なせば成る』や『社会人基礎力をみがく』というテキストを作成して、その授業を担当しているということであったが、このテキスト作成にはかなりの時間と労力が費やされたのではないと思われる。特に感心したのは、まだ作成途中であるテキストを我々のような外部の者に公表して、意見を聴取し、編集していききたいとのことから、参加者に1部ずつ配布された『社会人基礎力をみがく』である。このテキストには、学生が今後専門課程での学びや、社会でキャリアを積んでいくために必要となる基礎的な能力を伸ばしていくための方法論が説明されており、第1部の「大学での学びステップアップ編」では、レポート作成のためのインターネットリテラシーやコミュニケーションツールとしての電子メールの作成法、第2部の「就職戦略・社会人基礎力編」では、プレゼンテーション能力のステップアップやコミュニケーション能力のステップアップ、さらには、『敬語は難しくないー「うち」と「そと」の区別ー』など学生が興味を持ちそうな内容が編集されている。これらは本学の学生においても、必要不可欠な情報ではあるが、薬学教育モデル・コアカリキュラム改訂を前に、実施する時期、方法、担当者等については慎重に検討すべき問題であると考ええる。

第2に、山形大学の導入科目では、テキストで学習スキルの向上を図っただけで、学生生活についての指導・アドバイスは行っていなかったということで他大学の取組みが紹介されたのであるが、その取組みが非常に興味深く、本学においても検討する必要性を強く感じた。その取組みを大学別に配布資料¹⁾からそのまま転記する。

【 愛 媛 大 学 】

「新入生セミナー」で受講ルール、マナー、モラルの指導を行っている。

- ①受講ルールでは、遅刻・早退のルール、欠席の取り扱い（公欠制度なし）、授業アンケート等について
- ②モラルでは、剽窃、カンニング、代返・代筆等について
- ③マナーについては、教員とのつきあい方、教員との連絡方法、入室マナー、メールマナー、アカデミック・ハラスメントの対応等

【 金 沢 大 学 】

初年次導入科目に「大学・社会生活論」を開講している（必修）。

「新入生が、大学生活・社会生活に必要な知識、問題意識・イメージを獲得し、大学で学ぶことの意義をよく理解して、自らの将来像について考えるための授業科目」（専門分野の教員によるオムニバス講義）であり、学生生活上の諸注意、学生の社会的責任（社会人となるために最低限身につけておくべき知識・教養）についても講義（単なるマナー教育ではなく、学生に社会生活者としての自覚を促す教育）している。たとえば、ハラスメント（への対応）、薬物乱用問題、消費者教育（悪徳商法への注意喚起）、大人の交通マナー、環境論（ゴミの出し方、生活排水の処理）、健康論（たばこの害）等である。

今回紹介された2つの大学の取組みの中で、特に金沢大学のような学生が巻き込まれるトラブルの対策として、学生の関心が履修等に集中する入学時ガイダンスでの注意喚起より、1年前期に単位化された授業の中で学習させる方が有効との考えに賛同する。この件に関して、具体的に専門分野の教員によるオムニバス形式の講義を実施するようなことがあれば、総

合科目系教員が何らかの協力をすることは可能ではないかと思う。平成25年1月に開催された本学学生部委員会を前に、私は本学学生課・課長の金子浩二氏から、本学の「禁煙指導」の一環として、来年度4月の1年生オリエンテーション時に「たばこの害」等について、指導協力を打診された。私が担当している健康科学の授業でも「飲酒と喫煙」に関して取上げているので快諾した次第であるが、「たばこ」の問題はごく一部であり、これ以外にも他大学のようにオリエンテーションの時期に、指導しておくべき内容はたくさんあると考える。今後の課題として、高校生から大学生へ切り替わらせる重要なこの時期に、大学生として必要な知識・情報を指導し、学修に集中できるようオリエンテーションの内容および方法を再検討すべきであろう。

第3に、共通科目の改革の成果という説明の中で取り上げられた「健康・スポーツ」である。この成果とは、学生全員が何らかの形で「健康」の問題を考える機会ができたと感じているということと、スポーツ実技の多様化という点について、内容的に従来の科目とは少し異なるものを取り入れたということであった。具体的には、生涯スポーツの基盤を作るために、「武道」の授業の中に地元の利点・特色を生かした居合抜きや手裏剣などを取り入れ、それらを実際に体験することによって単なる技術の修得だけではなく、「人間力」につなげていこうとする試みを行っているとのことであった。

本学の「健康スポーツ」においては、山形大学のような授業体系は組めないにしても、中学・高校の体育授業とは異なる、大学あるいは東北薬科大学ならではの特色ある授業展開が必要と考える。例えば、まだ検討中であるが、本学体育学・深瀬友香子助教の専門である「ラート」を特色ある種目として取り入れ、その種目の特性だとか文化的な価値、歴史にも触れるようにして、教育内容を充実させることも有効かと考える。また、成績

評価に関しても、実技評価点や課題達成度等を明確化して成績が出せるような取組みが必要であると考ええる。

第4に、共通科目の今後の課題の中で説明があり、また今回のシンポジウムの最後に行われた総括討議でも質問があった、コミュニケーション・スキル1（英語）の習熟度別クラス分けと成績評価についてである。「共通科目」の特徴として紹介があった習熟度別クラス分けだったが、やはりクラス分けと成績評価が問題となっていた。何にでもメリット、デメリットは存在するかと思うが、同じレベルの集団の方が教員側にとっては指導基準を設置しやすく、効率的な授業が行えるかもしれない。しかし、上のクラスの成績下位にいる学生と下のクラスにいる成績上位の学生に対しての成績評価については、TOEICでの成績を20%取り入れて評価しているという説明だけで、大変難しい問題であり、学生もナーバスになっていることから、その評価基準は公表されず、不透明なままであった。専門ではないのでよくわからないが、TOEICとTOEFLのどちらが適切なのかという問題も含めて、その利用方法・成績評価等については、さらに検討が必要と考える。

Ⅲ. おわりに

今回、薬学教育モデル・コアカリキュラムの改訂を近年に控え、山形大学基盤教育シンポジウムに参加させていただいたことは、総合科目および体育、そして自分自身について考える良い機会になった。昨年11月末に開催された総合科目系委員会において、「カリキュラム改正にそなえて」という協議事項があり、薬学教育モデル・コアカリキュラム改訂が発表される前に、本学の教養教育として「どのような学生を育てたいのか」という理念を確立しておくべきとの合意があった。前述した本学の教育理念の内容と同様に、薬学教育モデル・コアカリキュラム改訂に向けて専門研究委

員会によって「薬剤師として求められる基本的な資質（案）」⁷⁾（10項目）として挙げられている①薬剤師としての心構え、②患者・生活者本位の視点、③コミュニケーション能力等は、山形大学の目指す「人間力」に該当するものであろう。もちろん「人間力」というキーワードに固執する必要はないが、これらのことを基本的な資質として、教養教育において「どのような学生を育てたいのか」というポリシーを明確にしておくことは、意義があると考ええる。これまで一般教養（現、総合科目系）や体育学教室上司の先生方に頼りっきりになり、前回のカリキュラム改正について無力であった自分自身を振り返り、体育学教室はもちろんのこと、総合科目系のためにも微力ながら何らかの形で貢献していきたい。

【参考資料】

- 1) 山形大学基盤教育院 山形大学理事・副学長 小山清人、「山形大学の教育改革について」、平成24年12月15日、山形大学基盤教育シンポジウム「教養教育改革と課題」配布資料①
- 2) 山形大学基盤教育院導入科目部門長・立松潔、「初年次導入教育の目指すもの」、平成24年12月15日、山形大学基盤教育シンポジウム「教養教育改革と課題」配布資料②
- 3) 山形大学基盤教育院基幹科目ディレクター・齋藤学、「“人間・共生” 大学理念と共通感覚」、平成24年12月15日、山形大学基盤教育シンポジウム「教養教育改革と課題」配布資料③
- 4) 山形大学基盤教育院教養科目部門長・須賀一好、「教養科目の不易と流行」、平成24年12月15日、山形大学基盤教育シンポジウム「教養教育改革と課題」配布資料④
- 5) 山形大学基盤教育院共通科目部門長・阿部宏慈、「技能と教養の間で」、平成24年12月15日、山形大学基盤教育シンポジウム「教養教育改革と課題」配布資料⑤
- 6) 中央教育審議会大学分科会・大学教育部会、平成24年3月26日、予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（審議まとめ）
- 7) 文部科学省高等教育局医学教育課、平成24年11月27日、日本私立薬科大学協会総会（平成24年度第2回）資料

